

進行 秋元 教頭  
記録 池永

議 題 平成22年度 第3回 学校協議会

開催日時 平成23年3月19日

開催場所 本校 応接室

出席者 [委員] 浅野委員 入江委員 柿原委員 北浦委員  
宮坂委員

[学校] 松本(校長) 秋元(教頭) 梅谷(事務長)

山本(主席・学習指導室長) 奥谷(主席・生徒指導室長)

浅田(学年室長)

資料「学力向上のための取り組み」

### 1. 北浦座長あいさつ

この春、めでたく六期生が卒業を迎えた。

### 2. 松本校長あいさつ

今回の協議会は最終回であり、これからの榎の木生の学力をいかに育成するかが課題である。なお、今年度は生徒指導件数は0であった。

### 3. 学校からの報告

「山本首席」

今年度は榎の木の方向性を今まで追求してきたが、私立特進でも、文理学科でもない、第3の高校として、存在を明確にしていきたい。

本年度の榎の木高校受検者は高槻・島本地区が減少し、摂津、吹田、枚方が増加した。

本校教諭が鳥取県立倉吉東へ学校視察に行ったが、学校の取り組みに大変感銘を受けた。

本校は教育委員会から表彰された賞金で、12月の終業式の日、一つひとつにメッセージが入ったチョコレートを生徒全員にプレゼントしたが、同じような取り組みを倉吉東高校も行っていた。独自の取り組みとして、保護者のメッセージを文集にして、ホームルームの時に活用している。また、実力考査は独自に作成しており、平均点が45点になるよう、努力しており、学力養成に関しては全教職員が厳しい態度で臨んでいる。

本校も、この学校の取り組みを踏まえ、さらなる環境整備として、生徒の学習モチベーションを上げるため、以下の4本柱を提起する。

- 1) 基礎学力の定着
- 2) 頑張る者が多数派になる集団の形成
- 3) 面談を中心とした個々への対応
- 4) 子どもの価値観や判断基準の変革

具体的には、本校が進めている「団体戦意識」をさらに高めさせ、「周りの頑張りが自

分のモチベーションを支えていることを自覚し、その一方で、自分の行動や発言に責任をもつこと」を徹底させる。個々の努力が全体へとつながり、全体が個を支えるのである。

例えば、クラブ活動には、学校として積極的な参加を呼びかけており、目的意識を持った規律ある集団に起こるパワーの爆発が学習面へと向かうことを期待する。進路を考える場合、保護者は最近では資格指向が強いが、一步踏み込んで、生徒と共に本来の「学び」の意味を考えていただくため、保護者向け進路ガイダンス等に力を入れる。今年の入学生には本校のロゴマークが入ったノートを持たせ、ノートを書く意味を考えさせる。

#### 4. 質疑応答、意見交換等

「浅野委員」

学習面での学校改善を考えると、予習は学習規範として必要不可欠である。実力考査を通じ生徒を磨くなど、榎の木の「学び」のスタンスを確立してほしい。

「宮坂委員」

大阪市の学力向上フォーラムで、良い成果の出る「小学校」は、教師が8時に来て子供を迎えている。学校が「学び」の場として確立されており、50分きっちり授業のできる学校は力がつく。生徒のモチベーションを高める方法は様々であるが、榎の木高校としては、生徒の目指す基準を高め、価値観の変革、"flexibility" "breakthrough"を目指してはどうか？

「山本首席」

本校の生徒は従順で真面目で、入学前より「榎の木高校は厳しくしつけられる」という考えが浸透しているので、変革するきっかけがない。良い経験を通じ、もっと逞しく変革してほしい。

「宮坂委員」

異文化と接するののも一つの方法であり、同世代の生徒や大学生などと接する機会があればよいのでは？

「浅野委員」

まるやかな変革が望ましい、過激な刺激により生徒を萎縮させるより、真面目な生徒であるから、真面目に3年間高校生活を送らせて、進学校に走り込む方法もある。愛知県立安城高校は、その一例である。ノートのとりかたに関する質問であるが、上手にノートをとる生徒はいるか？

「山本首席」

「その教科が好きであること」を感じさせるノートがある。後で見学した内容が分かるノートが望ましい。

「浅野委員」

予習すべき項目を明確にし、工夫をプラスすればよい。中堅層を伸ばすシステムは槻の木高校で確率されている。これを発展させ、上位層、下位層を伸ばせばよい。

「入江委員」

中学校でもノートの取り方を指導しているが、画一的になりがちである。

「松本校長」

ノートも一つの小道具であるが、大きな取り組みである。

「北浦委員」

槻の木高校に、新2年生と卒業生の娘がいるが、上の娘は3年生になって初めて勉強の仕方が分かったと言っていた。

「松本校長」

3月23日には本校合格者の保護者にも大学入試説明会に参加してもらい、本校のあり方に対するメッセージを受け取ってもらいたいと思っている。

「北浦委員」

保護者同士がコミュニケーションを持てる良い機会である。

「山本首席」

平日にもかかわらず参加希望者が多い。保護者の進路に対する安全志向や資格指向を払拭し、進路に対する先入観を除きたい。

「入江委員」

授業研究のあり方はどの様か。また、職業体験はあるか。

「山本首席」

授業研究は年に2回行っており、本格的な職業体験は行っていない。

「秋元教頭」

職業体験は1日看護体験しか行っていない。生徒による授業アンケートは年に2回実施している。

「松本校長」

将来の職業に関しては、夏休みの課題でレポートを提出させている。

「入江委員」

中学生にも職業体験をさせるが、目的意識を持たせることは難しい。

「秋元教頭」

本校教諭が視察に訪れた「倉吉東高校」では、生徒の希望を聞くのではなく、創り出し  
ている。

「柿原委員」

刺激は思春期にとって必要である。外部講師を呼び、色々なセミナーを行うのも一つの  
方法である。日本は人材が豊富であり、講師は十分いると思う。刺激や驚きは日頃接して  
いない人との出会いで得られる。

「松本校長」

意識的に生徒へ機会を提供したい。

「浅野委員」

一皮むけて成長するため、何かのしかけが必要である。

「柿原委員」

ガンバ大阪の選手が引退し、弁護士になった。こんな経験を生徒に聞かせてやれば良い  
刺激になるに違いない。

「松本校長」

本校に入る生徒たちは覚悟を決めている。そんな生徒をどう育成するかが課題である。

「山本首席」

いかに生徒の心を揺り動かすかが課題である。

「北浦委員」

本校の学校指定科目である「リーダー養成」など、とても良い刺激であり、京大の公開  
講座も良かった。

## 5. 各委員よりの提言

「浅野委員」

高槻を代表する高校となるため、中期5カ年計画が必要である。

「入江委員」

大変、勉強になった。高槻以外の受験生が多くいたのは、大学進学率が上がったからだ  
と思う。一層遅しく育ち、120%頑張る生徒が学べる学校をつくってほしい。

「柿原先生」

槻の木storyの確立が望まれる。保護者同士が対談し、それを子供がobserveするのも1つの手段である。

「北浦会長」

これからもメリハリのあるPTA活動を目指したい。

「宮坂委員」

「学び」について、教師の考えと教材に関連性が必要で、一本筋を通して全体を構築したい。キャリア教育について、直に職業を見せるのみならず、学業と職業を結びつける方法もある。質問の喚起については、質を高めたい。教員が子供を良く知り、さらに努力してほしい。

「校長」

御支援を感謝し、来年に生かしたい。